Yamaguchi University

山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第23号（2007. 3）

中学生に家族関係を考えさせる家庭科の授業研究（2）

――親子の接触時間を増やすことについて――

岡田　安恵*・入江　和夫

A Study on the Class of Home Economics Subject to Help Junior High School Students Think about Family Relation (2)

――About How to Increase Parent and Child's Contact Time――

OKADA Yasue, IRIE Kazuo

(Received January 12, 2007)

キーワード：家族、ふれあい、家事、共働実践

はじめに

前報[1)]で中学生に家庭科とは「家族・家庭生活」も扱う教科であることを意識化させる授業実践を報告した。現行の中学校家庭科では「A生活の自立と衣食住」と「B家族と家庭生活」の内容がある。「B家族と家庭生活」の学習では家庭や家族の重要性を理解させ、さらに家族関係をよりよくするためにはどのような方法があるのか、家族の一員としてどのようなことができるのかを具体的に考えさせることにしている。また、この学習は衣食住に関する知識や技能を習得する学習と関連させて、身に付けさせることが必要であると解説[1)]されているが、実践事例が見たらない。

そこで「B家族と家庭生活」の授業として“家族の団らん”“家族と話すこと”“家の仕事をすること”“家の仕事を家族と一緒にすること”の大切さの理解を深めること目的にし、「家族との接触時間」と「家族の共働実践」の内容を考えた。前者は家族と過ごす時間が有限であることで、今ある家庭や家族の重要性に気づかせることにした。家族関係をよりよくする、家族の絆を深めるための基本的条件とは、まず“親子の接触機会を増やすこと”である。しかし、このことをどのような方法で行ったらよいか考えにくいため後者の「家事の共働実践」がその方法の1つとなることに気づかせることにした。このことによって「B家族と家庭生活」と「A生活の自立と衣食住生活」を関連させた。

ここでは、生徒（S）と教師（T）による会話形式によって授業の進行状況を示していく。また、授業中の生徒の発言内容とワークシートへの記入内容、授業後の生徒の自由記述の内容、授業の目的達成を把握するためプレ・ポストテストの結果を分析することによって生徒の変容と学習内容の理解度を明らかにし、この教材を用いて行った授業について評価を行ったので以下に述べていく。

＊山口大学大学院教育学研究科

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

方法

1　対象生徒　宇部市立Ｋ中学校１年生（73名）、２年生（66名）、３年生（57名）

2　実践時期　１、２年生は2006年４月、３年生は2006年11月

3　指導計画

学習内容	時間	学習活動
家庭科の学習で大切なこと	1	教科書の目次を調べて、直接的に家族や家庭生活を学習する時間が少ないことに着目し、家庭科の目標の「家庭の機能について理解を深める」ためには「Ａ生活の自立と衣食住」の領域の学習においても「家庭・家族」と関連づけながら学習する必要性を理解する。
家族と過ごす時間		家族の生活時間を調べ、家族と一緒に過ごす時間が有限であること、アメリカの教科書の写真から家事を一緒にすることが家族のふれあいになることを知り、意識的に家族のふれあいの機会をつくり出す必要性に気づく。

4　ＴとＳの会話形式

①ＴとＳの応答によって授業は進行する。

②Ｔの発問に対し、Ｓの発言はワークシートに自分の考えを書くように指示してあるので記録として残り、これを本文中に示した。

5　評価方法

①Ｔの発問に対してワークシートに記入した内容の分析

②授業後の感想プリントの自由記述の内容の分析

③質問紙法によるプレテストとポストテストの結果の分析

結果と考察

（１）指導案

１）題材名　家庭科の学習で大切なこと

２）本時の設定意図

生徒達は、日常生活のちょっとした場面で家族の愛情を感じたり、家族とケンカをしたりして家族の存在を意識し、よりよい関係を築きたいと考えている。また、前時の学習で自分がいずれは生活の主体者になること、生活保持技能を習得は、よりよい家庭生活を実現させるための手段として必要であることに気づかせ、教科書の目次で「Ｂ家族と家庭生活」が中学校の家庭科の学習の柱の一つであることを押さえた。宿題として教科書の目次の項目ごとのページ数を学習プリントに記入させた。

本時では、教科書の目次を調べて、直接的に家族や家庭生活を学習する時間は少ないことに着目させ、よりよい家庭建設のための実践力を身に付けるためには、家族・家庭生活と関連づけながら「Ａ生活の自立と衣食住」の学習する必要性に気づかせたい。また、事前に家族との接触時間を調べさせ、家族と過ごす時間が有限であることに気づかせ、どうしたら増やせるのか自分の問題として考えさせたい。この問題を解決するヒントとしてアメリカの教科書[2)]の挿絵を提示し、家事の共働実践が家族のふれあいの機会をつくり出すことに気づかせ、よりよい家族関係を築くために、家族の一員として自分にもできる具体的な手だてがあることに気づかせ、家庭での実践につなげたい。

３）主眼

家族・家庭生活と関連づけながら「Ａ生活の自立と衣食住」の学習する必要性に気づかせる。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

4）準備物　生活時間調べプリント、学習プリント、感想プリント

5）学習過程

段階	学習内容	生徒の活動	支援上の留意点
課題の意識化	1．家庭科の教科書の内容	①教科書を見て、「家庭・家族」について学習する所は何ページあるか調べる。	・直接的に「家庭・家族」について学習する時間数が少ないことに気づかせる。
	2．家族との接触時間	②事前にまとめておいた家族の生活時間帯調べの表で家族の接触時時間を確認する。	・家族の生活時間を一覧表にまとめ、家族が一緒に過ごしている時間をチェックさせることで日常生活の中で家族との触れ合いが充足しているかどうかを考えさせ、学習に対する課題意識をもたせる。
課題の追究・解明／まとめ	3．アメリカの教科書	③アメリカの教科書の挿絵につける説明文を考える。	・衣食住に関する家庭の仕事をすることを家族の家事労働の軽減のためとしか考えていないことに気づかせる。
		・実際の説明文と比較してみる。	・無理をして特別な時間を設定するのではなく、日常生活の中で自分たちも日頃からしているお手伝い等をすることが家族のふれ合いになるという意識を持って生活をすることが、家族のふれ合いを深めることになることに気づかせる。
	4．家庭科の学習で大切なこと	④アメリカの教科書のお手伝いについての考え方を参考にして「家庭・家族」のことをもっと考えるにはどうしたらよいだろう。	・「A生活の自立と衣食住」の領域の学習においても「家庭・家族」と関連づけながら学習することが大切なことに気づかせる。
	5．本時のまとめ	⑤本時の学習内容のまとめや感想を友だちと話し合う。	・前回とは違う人と2人組を事前につくらせておき、今日の授業でわかったことや感想を話し合わせ、話し合って気づいたことをプリントにまとめさせる。

6）評価

「B家族と家庭生活」と関連づけながら「A生活の自立と衣食住」学習する必要性に気づくことができたか。

（2）学習プリント

家庭科学習プリント №1　　家庭科ってどんな教科（Part2）

年　　組　　番　　氏名

1．中学校の家庭科で学習する内容とページ数を教科書で調べてみよう。家族・家庭生活について学習することができると思う項目はチェック欄に○を付けよう

教科書の目次の記述	ページ	チェック	教科書の目次の記述	ページ	チェック
自立に向けて生活の自立と衣食住			中学生になるまで		
健康と食生活			私の成長と家族や周囲の人びと		
食品の選択と調理			子供の成長		
これからの食生活			幼児の生活と遊び		
学習のまとめ			幼児の成長		
自分らしく清潔に着る			子供と家族や周囲の人びと		
日常着の活用			学習のまとめ		
日常着の手入れ			わたしと家族・家庭と地域		
これからの衣生活			わたしと家庭生活		
学習のまとめ			家庭生活と地域		
快適に住まう			学習のまとめ		
住まいのはたらき			わたしたちの消費生活と環境		
家族と共に住まう			生活に必要なもの		
健康で快適に住まう			商品の選択と購入		
自然と共に住まう			消費生活と環境		
学習のまとめ			学習のまとめ		
家族・家庭について学習するページの合計			ページ		
感じたこと					

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

2．家族の生活時間調べで気づいたこと、考えたことをまとめよう。

家族と一緒に過ごしている時間	平日	
	休日	
一緒にしていること		
気づいたこと・感じたこと		

3．下のアメリカの教科書に掲載されている写真にあなたならどんな説明文をつけますか

わたしの説明文
理由

アメリカの教科書の説明

4．「家庭・家族」のことをもっと考えるにはどうしたらよいだろう

（３）授業内容

１）ワークシート１「１中学校の家庭科で学習する内容とページ数を教科書で調べてみよう」

前時の学習によって生徒は、家庭科の学習内容「A生活の自立と衣食住」「B家族と家庭生活」の２つあることを知った。当然、教科書にもおいても「A生活の自立と衣食住」が「B家族と家庭生活」と同じように扱われていると考えることが予想される。しかし、実際には教科書の記述量は「A生活の自立と衣食住」の方が「B家族と家庭生活」より多い。この量的なちがいに着目させるとともに、前時の学習で衣食住生活についての学習が家族・家庭生活につながっていることに気づいたことを思い出させ、「A生活の自立と衣食住」と「B家族と家庭生活」を意識的に関連づけて学習することの必要性に気づかせるためにワークシート１の「１中学校の家庭科で学習する内容とページ数を教科書で調べてみよう」について授業を行った。

T：「家庭・家族について学習する所と思うところをチェックして全体で何ページあるか計算してみよう。」と指示した。

S：「家族とか家庭とかいうことばが入っていないところも入れてもいいんですか。」

T：「具体的には、どういうところが当てはまると思うのですか。」

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

S：「前の時間勉強したから、自立に向けて生活の自立と衣食住とかも家族のことを考えられると思います。」と答えた。

この生徒の発言によって他の生徒も「じゃあこれもそうかなあ。」と「A生活と自立と衣食住」の学習内容についても家族に関連していると考えるようになった。そこで

T：「もし、前の時間の学習をしていなかったらどうだっただろうか。前の時間の学習によってチェックしたところが増えた人は手をあげてみよう」と聞いてみると、

ほとんどの生徒が手を挙げた。教科書の目次の記述の中に「家族」という表現が含まれているのは、28.5ページだが、前時の学習を思い出して、最も多い生徒で129ページ「B家族と家庭生活」と関連していると答えた。このことから生徒達は、「A生活の自立と衣食住」に関する学習においても家族のことを考えることができた。

2）ワークシート2「2家族の生活時間調べで気づいたこと、考えたこと」

前時の学習で生徒達は、家族・家庭の精神的機能の低下に危機感をもっていることに気づいた。本時では、毎日の生活の中で個々の家族の生活時間のずれによって、家族のふれあいの機会が減少していることに気づかせ、家族のふれあいの大切さを再認識させたい。そのためにワークシート2「2家族の生活時間調べで気づいたこと、考えたこと」について授業を行った。なお、事前に宿題として家族全員の生活時間を調べさせた。

T：「先生の家族は4人家族です。平日は、約1時間、休日は、約3時間家族全員が同じ場所で同じことをしていました。子ども達が独立するまで後どれくらいの時間一緒にいられるか計算してみよう。」と投げかけた。複雑な家庭環境の生徒もいることから、教師の家族の例を全体で計算した。

T：「先生の子どもはまだ9歳なのに、もし、彼や彼女が18歳で下宿するなどして家を出て行くと考えたら、あと2年分も一緒にいる時間がないんだね。」

S：「先生がかわいそう。」と発言したので

T：「なぜ、そう思うの。」と聞いてみると、

S：「先生は子どもさんが、大好きなのにこんな計算をして子どもさんと一緒に過ごせる時間に終わりがあることを知って悲しいと思ったからです。」と答えた。

T：「ありがとう。でもね、終わりがあることは悲しいけど、そのことを知ったからこそ、どうしたら、その時間をもっと中身の濃いものにすることができるかを考えて、むだにすごさないように努力できると思うけどな。どう思う。」と聞き返すと、

S：「そういう考え方もあるかもしれないけど、家族と過ごす時間が少ないことは悲しい。」と答えた。

T：「私たち親が帰ったら、彼たちはどうにかして自分たちの話を聞いてもらおうと私たちのそばから離れまいとしているのにこんなに少ないんだよ。中学生になってもいっしょにいてくれるかな？みんなはどうかな？あなた達の方から一緒にいる時間を減らしていないかな？」と投げかけた。

ほとんどの生徒が、家族と一緒に過ごしている時間は、例として取り上げた教師の家庭より少なく、平日では30分程度、休日では1時間程度という生徒が多かった。家族がそろう時間が全くなかった生徒は、平日では、各クラス1年生では約

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

1/4、２、３年生では約1/3、休日でも各クラス２、３人程度いた。生徒達は、

Ｓ：「え～、少な～い。」

Ｓ：「考えてみたら当たり前だけど、家族と過ごす時間って終わりがあるんだ。」

Ｓ：「何とも思っていなかったし、いつも一緒にいると思っていたのに、すごく少なくてびっくりした。」

これまで家族と過ごす時間について全く考えたことがない生徒達にとって、家族そろって過ごす時間が有限であることに気づいたことは、かなりショックだったようである。学年による反応に差はなかった。この授業中に涙ぐむ１年生女子生徒が１人いた。

Ｔ：「だからこそ、これから、家庭科でどうしたらいいのか、何ができるのかを考えて行きましょう。」と投げかけた。

このようにワークシート２の学習すなわち「家族と一緒にすごくことができる時間を考えさせる」ことによって、生徒達に家族の大切さを再認識させることができたと考えられる。

3）ワークシート３「３アメリカの教科書に掲載されている写真にあなたならどんな説明文を付けますか」

生徒達は家族と過ごす時間が有限であることに気づき、ショックを受け、どうしたらよいのか具体的な方法を知りたいと思われる。そこで、家事の共働実践が、家族のふれあいの機会になることに気づかせ、自分たちにもできる具体的な方法を見つけ出させたい。また、家の仕事をするという「Ａ生活の自立と衣食住」の学習が、家族関係をよりよくする方法を考えるという「Ｂ家族と家庭生活」の学習に関連していることを実感させたい。そのためにワークシート３に授業を進めた。生徒の反応は大きく２つに分かれた。

①「Ａ生活の自立と衣食住」と「Ｂ家族と家庭生活」の関連に気づいていない生徒の反応

・お母さんの手伝いをしてあげた方がいいよ。お母さんが楽になるよ。
・お母さんと子供が一緒に皿洗いをしています。
・たくさんお世話になっているから恩返しをしよう。

②「Ａ生活の自立と衣食住」と「Ｂ家族と家庭生活」の関連に気づいた生徒の反応

・親子が一緒にいる時間を長くするために親子が一緒に皿洗いをしています。
・お母さんと娘が一緒に皿洗いをしています。あなたは親と一緒に何かをしていますか。
・この写真はお母さんと子供が話をしながら片付けをしている写真です。
・１日に家族といる時間は少ないけど自分から近づくとふれあいの時間が増えるよ。
・お母さんと子供が楽しそうにお皿を洗っています。少しでも家族と過ごす時間を増やそう。家族といることは大切です。自分から進んで時間を作ろう。

教師の提示の意図に気づいていなかった生徒達も各学年、約半数いた。そこで、

Ｔ：「アメリカの教科書にはね、あなたは家族のふれあいの時間を増やす努力をしていますか。と書いてありました。」と説明すると

Ｓ：「家族のふれあいの時間は作りだすもんなんだ。」

Ｓ：「ぼくたちが作り出すことができるんだ」とつぶやいた。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

この発言によって教師の提示の意図をクラス全体で共有することができた。他のクラスについても同じような発言をする生徒がいた。表現こそ違いがあるが、家族とのふれあいの機会を自分たちからつくり出すことができるというものであった。

このように、ワークシート３の学習によって生徒は、「Ａ生活の自立と衣食住」と「Ｂ家族と家庭生活」の関連づけ、すなわち家事の共働実践をすることが家族のふれあいの機会をつくり出すことにつながることに気づいた。

（4）生徒の授業後の感想

生徒はこの授業をどのようにとらえ、何を理解したのだろうか。このことを把握するために生徒の自由記述を以下に示した。

1）「家庭・家族」について学習する時間数が少ないことについて

a 教科書の中で、家族のことは少ないけど、全部家族のためのことを家庭科は勉強するんだと思う。

b 家族についてのページ数は少ないけど、全てのページの１ページ１ページが大切なんだと思いました。

c 家族のことは少ないけど、残りの所の衣食住の所も家族・家庭に関係していることがわかった。

ａは、家庭科の学習と家族の生活を関連づけて考えるようになっている。ｂは、家庭科の学習内容は個別に考えるのではなく総合的にとらえることが大切であることに気づいている。ｃは、「Ａ生活の自立と衣食住」の学習が「Ｂ家族と家庭生活」にリンクしていることに気づいている。

このように生徒の自由記述から、教科書の目次を利用して家庭科の学習内容を確認させることは、家庭科の学習が生活という視点から相互に関連していることを生徒に気づかせるのに有用であると考えられる。

2）家族との接触時間調べをして

a 家族はいつも近くにいるようだけど、みんながみんな私のそばにそろっているわけではなかったんだと気づきました。

b 私は、家族のみんなとたくさん一緒にいつもいると思っていたけど、そんなにいっしょにいないんだぁと思いました。

c 保育園から小学生そして、中学生と成長するにつれて家族と一緒に過ごす時間が少なくなっていると思った。

d 家族と過ごす時間がとても少ないとわかって驚きました。家族と一緒に過ごす時間が成長するとともになくなってきたので、もっと時間を増やせるように努力していけたらいいなと思いました。どうやったらできるようになるか考えてみたいです。

e 今日の授業で「家族と一緒に過ごす時間＝有限＝とても短い」ということがわかってびっくりもあるし、寂しいという気持ちになりました。毎日何気なく昨日まで過ごしてきたけど、後もうほんのわずかになっていると思うと毎日毎日家族とのふれあいを大切にしていきたいと思いました。

f 思ったより家族と過ごす時間が少ない。仕事で家に帰るのが遅くなるのは仕方ないけど、部屋にこもってゲームをするより家族としゃべりたい。もっと家族といる時間を増やしたい。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

g 自分は、食事が終わるとすぐに自分の部屋に行ってしまっているので、自ら家族とふれあう機会を減らしているんだと思った。

h 日頃、家族と一緒に過ごしている時間なんて考えたこともなかったから、今日はじめて考えてみて一緒に過ごしている時間ってのは、すごく少ないと思った。親の仕事のこともあるけど自分から家族とのコミュニケーションを避けていたのかなと思う。自分だけの都合だけで家族との時間を壊すというのはいけないことだと思ったし、いやだなと思った。

i 家庭科でこれから家族のふれあいに関してや、家族のことをもっと調べて家族との時間を考えていこうと思いました。

j 18歳になるまで6年もあるのに一緒に過ごす時間を合わせると1年間分にもならないなんてものすごくびっくりしました。これから一緒に過ごす時間を自分で作っていけたらいいなぁと思いました。

k 思春期でも家族の大切さは変わらないんだなと思いました。今の時期は、家族とケンカしてしまったり、仲が悪くなって話をすることが少なくなってしまったりしてしまうけど、私は、思春期だからといって家族とのふれあいの時間を減らしたくないなぁと思いました。平日は、1時間よりも少ない時間しか一緒にいられないと知ったけどこれからは手伝いをもっとしたりして努力していこうと思います。

l 家族とはいくらでも話せると思って進んで家族とふれあったりしてこなかった。今日の授業の家族とふれあう時間が少ないと言うところがとても衝撃的だった。家族のだれかが何かをやっていたら、他の人が何も言わなくてもその人の手伝いに行けるような家族の雰囲気を作れば家族のふれあう時間が激増すると思う。家族とのふれあいの時間を増やそうと努力すれば必ず、家族のふれあいに時間が増えると思った。せっかく話し合ってでた意見なので、実際にやってみようかなと思った。

a、bは、授業前は、自分と家族は常に一緒にいると考えていたが、実際に計算することでその漠然とした考えが間違っていることに気づいた。c、dは、子どもが成長するにつれ、家族と一緒に過ごす時間が少なくなることに気づいた。dは、そのことに気づき、自分の努力によって増やしたいという意欲をもつようになった。eは、「家族と一緒に過ごす時間＝有限＝とても短い」に驚きと寂しさを感じ、家族のふれあいを大切にしたいと考えるようになった。f、g、hは、自分たちが、せっかくの機会を壊していることに気づき、hは、そのことを嫌だと思い、fは、家族と過ごす時間を増やしたいと考えるようになった。d、iは、家庭科の授業で、家族について考えたいと考えるようになった。j、k、lは、自分からつくり出したいという積極的な考えを持った。kは、家族のふれあいの大切さ、自分たちの努力によって改善することを友達と話し合いながらに気づいたことに価値を見いだしている。

このように家族の接触時間を計算させることは、家族のふれあいの大切さを再認識させるのに効果的であったと考えられる。

3）家事の共働実践が家族のふれ合いになるという意識して生活をすることについて

a 私のことだけど・・・。無理でなければ、できるだけ進んで手伝いや一緒にしゃべる時間を増やしていきたいです。そして、1分でも1秒でも家族といる時間を増やせればいいです。

b 私が食事の時に学校のことやいろいろな話をしたりして、できるだけみんな一緒のこ

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

とをするようにすれば、家族のふれあいが増えると思います。

c たぶん自分が行動に移すことが大切だと思いました。すごくお世話になっているから、家族も大切だし、家庭も大事。

d 親と一緒にしゃべってみて会話を多くしたい。自分から一緒に食器などを洗って自然に会話をしたら一緒にいる時間が増えるし、楽しくていいと思う。親と一緒に過ごすことができる時間が少ないから、どうしたらいいかとか考えていっぱいしゃべったりしたい。

e 私はいつも家事を手伝いながら「いつかは、全部自分一人でしなくちゃいけないから今のうちに一通りの仕事ができるようにしないといけない。」と思ったり、たまに母が先に寝て嫌々私がすることもあったりしたけど、私は知らず知らずのうちに手伝いをすることによって家族と関係を深めていたんだと思った。年を重ねるにつれ増える家の仕事も信頼があるからこそ任されているのであり、家族の一員としての役割はおろそかにできないんだなと改めて感じることができた。

f「家の仕事をする意味」なんて今まで考えても見なかったので改めて考えさせられて家の仕事をするのは大切なんだなと思いました。それだけではなく、これから家の仕事をするときは一人でやるのではなく家族と協力しながらしたいと思います。なるべく時間があれば家族と話す時間、ふれあう時間を自分から作って信頼し合える家族にしたいです。

g 今まで家の仕事をするのが嫌で親に反抗したりしていたけど、あと親と一緒にいられるのは約○時間しかないよと言われ、気持ちがかわりました。今までは親とスーパーとか行かなかったけど、今日帰って、早速一緒に行きました。家の仕事も文句言わずにしました。そうしたら、お父さんの機嫌がよくなったので、自分が変わればこんなにも家の中が変わるんだなと思いました。家の仕事の力ってすごいなと思いました。

h 私はあまり、家族との時間を過ごしたいとは思いません。特にお父さんと話すのは好きではありません。お母さんに遊びに行こうと誘われても断ってしまうことが何回もありました。だけどやっぱり寂しいと思うときもあります。今でも家族一緒に寝るときがあります。だからやっぱり、家族との時間を大切にしていきたいです。

i 僕は家族との時間が好きではないけど、離れるのは寂しくて家族とのふれあいの時間は必要なんだと思いました。親はいやだけどふれあいの時間を作ろうと努力することの大切さを知った。

j みんな家族と一緒に過ごす時間があと少ししかないと知ってショックを受けたみたいですが、僕はあと少しで自分だけの自由な生活ができると思うとわくわくしました。

ａ～ｇ全員が主体的に家族との時間を増やしたいと考えるようになった。具体的な方法としてａ、ｂ、ｄ、ｆは会話の増加を、ｄ、ｅ、ｆ、ｇは家事の共働実践をあげた。ｅ、ｆは、家の仕事をするが、家族からの信頼を得ることができることにも気づいた。ｇは、気づいたことを実践に移し、父親の反応から家族とのふれあいと家の仕事をすることの大切さを実感している。ｈとｉは、家族のふれあいの必要性は理解しているが、実際の自分と親の関係に置き換えると積極的にふれあいの機会を増やそうとは考えられないようである。ｊは、自立＝自由気ままな生活と考え、家族と過ごす時間があと少ししかないことを喜んでいる。今後、自立の意味を考えさせていくことも必要であると感じた。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

このようなワークシートを用いた授業によって、家族のふれあいの機会を増やすために自分たちに実践できる具体的な手だては「A生活の自立と衣食住」の内容であることを理解させることができた。

(5) 生徒の変容

客観的な授業評価のために、授業の前後に「家族」に関するプレ・ポストテストを行った。各質問項目について4つの選択肢の中から当てはまるものを1つ選ばせた。各選択肢を最も否定的なものから順に1 (全くない) ～4点 (非常にある) で点数化し、授業の前後で対応のあるt検定を行った。(表2)

表2「家族」に関するプレ・ポストテスト結果 (対応のあるt検定)

質問項目	調査時期	1年 平均値	1年 有意確率	2年 平均値	2年 有意確率	3年 平均値	3年 有意確率	全校 平均値	全校 有意確率
1.家族団らんの大切さ (1年n=69 2年n=63 3年n=55 全校n=187)	授業前	3.61	0.8291	3.41	＊＊＊	3.45	＊	3.50	＊＊＊
	授業後	3.59		3.63	0.0001	3.65	0.0103	3.63	0.0009
2.家族と話すことの大切さ (n=68 2年n=63 3年n=55 全校n=186)	授業前	3.60	0.8366	3.38	＊＊	3.38	＊＊	3.46	＊＊
	授業後	3.59		3.57	0.0094	3.65	0.0030	3.60	0.0020
3.家の仕事をすることの大切さ (n=69 2年n=63 3年n=55 全校n=187)	授業前	3.41	0.0897	3.49	0.1348	3.38	＊＊	3.43	＊＊＊
	授業後	3.51		3.59		3.67	0.0012	3.58	0.0001
4.家の仕事を家族で一緒にすることの大切さ (n=69 2年n=63 3年n=55 全校n=187)	授業前	3.06	＊＊＊	2.90	＊＊＊	2.89	＊＊＊	2.96	＊＊＊
	授業後	3.35	0.0006	3.54	0.0000	3.60	0.0000	3.49	0.0000

＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.01$　＊＊＊ $p<0.001$

質問項目全てについて、全学年で平均値が授業後高く、有意差が有ることから「家族団らんの大切さ」「家族と話すことの大切さ」「家の仕事をすることの大切さ」「家の仕事を家族と一緒にすることの大切さ」の理解が深まったと考えられる。

項目別に見てみると「家族団らんの大切さ」については、2年、3年は約3.4であり、これは平均 (2.5) 以上であることから、授業前も団らんを大切だと考えていたが、この授業後、その考えはさらに高まった。しかし、1年生は変化しなかった。

「家族と話すことの大切さ」についても2、3年は約3.4であり、授業前も家族の会話を大切だと考えていたが、この授業後、その考えはさらに高まった。1年生は、授業前後で変化がなかった。

「家の仕事をすることの大切さ」は3年のみ授業の前後で有意差があり、大切さの理解が深まった。1、2年生は、有意差は見られなかったが、授業後の平均値は1年生3.51、2年生3.59と平均より高い。「家の仕事をすることの大切さ」は理解していると考えられる。

「家の仕事を家族で一緒にすることの大切さ」は、授業前1年は2.3、2、3年は約2.0であり、平均より低く、あまり大切だとは考えていなかったが、授業後は、どの学年も平均以上となり、その大切さを理解したと考えられる。

まとめ

今回の結果は以下のようにまとめられる。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

1）全校について「家族の団らん」「家族と話すこと」「家の仕事をすること」「家の仕事を家族と一緒にすること」の大切さの理解度は、プレ・ポストテストによって授業後の平均値が有意に増加したことから、これら項目の理解が高まった。
2）（4） 1） a、b、c の感想から、本時の学習によって生徒は家族・家庭生活と関連づけながら「A生活の自立と衣食住」の学習する必要性を理解させることができた。

おわりに

「家族の団らん」「家族と話すこと」「家の仕事をすること」「家の仕事を家族と一緒にすること」の大切さの理解を深める「B家族と家庭生活」と関連づけながら「A生活の自立と衣食住」を学習することに気づいた。その理由は、思春期にあり家族とのふれあいを避けようとする傾向がある中学生に、「家族の団らん」「家族と話すこと」の大切さを理解させ、家族関係をよりよくするための具体的な手だてとして「家の仕事を家族と一緒にすること」を認識させることは大きな意味を持っている。「B家族と家庭生活」の内容は単独で扱っても概念的なものに終わってしまい、具体性を欠いたものになり、生徒の理解を深めることは難しい。今回行ったように「A生活の自立と衣食住」の学習が「B家族と家庭生活」につながっていることを生徒に理解させることによって「B家族と家庭生活」の内容は実践的・体験的な理解となり、具体的な家庭の実践に結びつくものとして考えられる。

家庭の精神的機能の低下を指摘した平成10年6月30日の中央教育審議会答申「幼児期からの心の教育の在り方について」[4]を踏まえ、文部科学省は、家庭教育手帳[3]の中で子ども達が家庭に最も望んでいるのは「家族が楽しく過ごすこと」であるとし、家族家庭の精神的機能を重視している。この家庭教育手帳は、そこには、心安らぐ楽しい家庭は、“家族が意識的に協力し合わなければ得られない”とある。

今回作成したワークシートによって生徒は、家族と一緒に過ごす時間が有限であること、家族のふれあいの機会はつくり出すものであること、家事の共働実践が家族のふれあいになることに気づいた。その学習過程において、家族の大切さを再認識し、よりよい家族関係を築くために自分にもできる具体的な方法があることに気づいた。今後はさらに、気づいた方法を実際の生活に生かしていこうとする意欲を高めることが必要である。そのためには、具体的に生徒「家族と話して楽しかった」と感じることができる体験的活動を仕組むことが必要である。この体験活動を仕組むためには、保護者の理解と協力を得ることが不可欠である。そのために「家庭科だより」の発行など具体的な手だてが考えられる。

参考文献

1）岡田安恵、入江和夫「中学生に家族関係を考えさせる家庭科の授業研究（1）－技能教科からのイメージチェンジー」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、第23号、pp.59-67（2007）
2）中学校学習指導要領（昭和33年10月）解説－技術・家庭科－文部省
3）米国家庭科教科書「TEEN LIVING 」Unit 2 Relationships Chapter 4 Relating to Other P81
4）家庭教育手帳（文部科学省）http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/main8_a1.htm
5）中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」答申第2章もう一度家族を見直そう http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/980601.htm#2

NII-Electronic Library Service